学習高度化を目指した学校組織マネジメントの研究
―学力向上に向けて取り組む組織の同僚性の構築に視点を当てて―

教育実践力高度化コース
17AD005
神山　稔

【指導教員】　庄司　康生　　上園　竜之介　北田　佳子
【キーワード】　校内研修　学力向上　同僚性　主体的・対話的で深い学び

１．はじめに

全国学力・学習状況調査や，埼玉県学力・学習状況調査等が実施されるようになったことにより，保護者や社会の学力に対する関心も高まっている。学校は子ども一人一人の学力を着実に保障しなければならない。現在，「学力日本一」を目指す熊谷市にある本校においても，学力向上に向けた様々な取組がなされている。プリント学習や補習的な学習，授業や宿題での学習等，様々な形で取り組んでいる。しかしながら，学力向上に向けた様々な取組を推進していく中で，多種多様な校務を遂行しながら成果を上げていくことの難しさを日々実感している。

また，情報化やグローバル化，ＡＩの急速な進化などによる急激な社会的変化の中，子どもたちに必要とされる資質・能力も変化している。それに伴い，家庭や地域から期待される学校の役割や社会からのニーズも変化している。学校は，従前の教育観を変化させるとともに，高度専門職としての教師の質の向上に努めていかなければならない。国立教育政策研究所（2016）は，先行きの見えない変化の激しい時代においては，自らが主体となり，自力あるいは他者と協働して，知識を基盤に新しい答えや価値を生み出して問題を解決していくためには，以下の３点が重要であるとしている。

①一人一人が考えや知識，知恵を持ち寄り主体的に答えを作り出すこと
②単に知識を覚えていることより，調べたこと使って考え，情報や知識をまとめて新しい考えを生み出す力
③多様性を生かして，問題を解き，新しい考えを想像できる力

学校教育では，子どもたち一人一人が自分の考えを持って，仲間と協働して答えを想像する経験を豊かにすることが望ましいとしている。つまり，これからの学校は，単に知識を習得させるだけではなく，その意味や理由を考え吟味する時間を提供し，子ども一人一人が考えを整理したり再構築したりしながら，活用することができる知識の習得をめざす授業を，学校全体で組織的に展開していくことが求められていくことになる。これは，次期学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善としても指摘されている。

しかしながら，学校現場では，多種多様な校務による多忙化，近年の大量退職・大量採用の影響による年齢構成の不均衡による同僚性の希薄化などから，なかなか同僚と協働することが難しい現状にある。

そこで本研究では，上記のような現状を踏まえ，校内授業研究会を柱に，「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善・授業力向上をとおして，授業の質を高め，学力向上に向けて協働することのできる組織の在り方を探っていきたい。

２．「学び」と「学力」

（１）学習高度化とは

本研究では，課題解決的な学習における「子ども同士のつながりの中で，考えたり表現したりしながら，自分の考えを整理し再構築することで学びを深めていく子どもたちの姿」を「学習高度化」と定義する。一斉授業スタイルの教え込み型授業から脱却し，「主体的・対話的で深い学び」の授業改善をとおして学習高度化を図っていく。

（２）「学力」とは

本研究では，これからの時代に必要となる資質・能力を踏まえて，全国学力・学習状況調査のＡ問題で問われるような基礎的な知識だけではなく，Ｂ問題で問われる習得した知識を活用する力，さらには，習得した知識を活用することで得られる知識や，知識を習得しようとしたり活用しようとしたりする主体性を含めて「学力」と捉えることとする。

（３）「学び」とは

佐藤(2012)は学びについて以下のように述べている。学びとは対象（教材）との出会いと対話であり，他者（仲間や教師）との出会いと対話であり，自己との出会いと対話である。私たちは他者との協同をとおして，多様な考えと出会い，対象（教材）との新たな出会いと対話を実現して自らの思考を生み出し吟味することができる。その意味で，学びは本来的に協同的であり，他者との協同に基づく「背伸びとジャンプ」である。すでに知っていることやわかっていることに習熟しても，それを「学び」と呼ぶことはできない。学びは既知の世界から出発して未知の世界を探検する旅であり，既有の経験や能力

を超えて新たな経験と能力を形成する挑戦である。一般的に行われてきた一斉授業のスタイル（教師主導型）では，教室の中で学ばない子どもや学べない子どもが存在し，一部の子どもにしか学びが成立していない。学力上位層の子どもにとっては，課題が簡単すぎたり既知の内容であったりすることで，そこに学びが成立しない。逆に，学力低位層の子どもにとっては難しく，個人の力ではどのようにすればよいか分からないので，黙って聞いているだけの時間になってしまう。

学校は，教室で学ぶ子どもたち全員の学習する権利を保障し，学力向上を目指していかなければならない。本校においては，子ども一人一人が課題（教材）と向き合う時間，分からないことをそのままにしないための教材や他者との対話の時間，考えを整理し再構築するための自己との対話の時間を授業に取り入れる「協同的な学び」を全ての教室で実践していくことにより，学習高度化を図り，学びを深めることで学校全体の学力向上を目指していく。

（４）協同的な学びの授業

学校が組織として協同的な学びの授業づくりを共有することで，教師は専門家として学び合い，授業力を高め，子どもたちの学びの質を高めていくことができる。協同的な学びの授業実践を推進していく上での教師の共通理解事項を以下に挙げる。

①「学習内容（何を学ぶのか）」を明確にした授業

学習内容を明確化し，教師と子どもが共有することで教室の誰もが授業に参加することができる。また，課題を探究するときの軸となり，学びを深めることができる。

②「夢中になって活動できる（ジャンプの）課題」を探究することができる授業

一見しただけでは解けなさそうだが，子どもたち同士で支え合いながら探究することで解ける課題を準備し，子どもたちの思考を積極的に促す。簡単すぎる課題は上位層の子どもたちの学びを深めることができない。より高度な課題に協同的に取り組むことで，誰もが夢中になって活動し，質の高い学びを保障することができる。また，資料を精選して提供することで，探究の手がかりとなり，より深い学びにつなげることができる。

③「グループ学習」で全員の学びを保障する授業

一斉授業のスタイルでは，一人で解けない子どもや何をどうしたらよいかわからない子どもが他者に依存することができず，その子どもの学びを保障できなくなってしまう。グループ学習を導入することで，他者に依存し，助け合い，支え合いながら学びを深めていく。３，４人組にすることで，活動に全員が参加できるようにする。また，男女混合班にすることで，一人一人が対等に参加できるようにする。

グループ学習では，分かった子どもがわからない子どもに教え合う「教え合い」ではなく，分からない子どもやすり合わせが必要な子どもが必要に応じて聴き合える，互恵的な関係に基づいた「学び合い」になるようにする。わかっている子どもは，わからない子どもの視点で相手が納得するまで話すことで，自分の考えの幅を広げ学びを深めることができる。学びは個のものであるが，個の学びには他者が必要だからである。できるだけ毎時間，短時間でも取り組めるようにする。低学年の授業では，発達の段階から考え，全体学習とペア学習による協同的な学びを実践していく。

④「コの字型の机配置」でつながりのある授業

コの字型の机配置にすることで，子どもたちがお互いの顔を見ながら聴き合ったり伝え合ったりすることができ，子どもの安心感につながる。机がつながっていることで，子ども同士がいつでもつながることができるので，全員の授業参加の土台ともなる。子ども同士の対話が生まれることで，自分の考えを整理，再構築しながら学びを深めていくことにつながる。

⑤教師の基本姿勢は「聴く」「つなぐ」「もどす」

聴き合う関係をベースに協同的な学びを成立させるために，教師は語りすぎず子どもの声を聴くことを意識する。つぶやきが大切にされることで，子どももつぶやきを発しやすくなる。子どもの声を聴くことで，教師は子どものつぶやきを拾いやすくなる。子どもと子どもの声をつなぎ，子どもと教材をつなぎ，子ども同士をつなぐ。声をつなぎ，教材をつなぐことで，答えそのものではなく答えを導き出す課程や根拠を重視できるようになる。子ども同士をつなげることを意識することで，いつでも友達に頼ることができる関係を築くことができる。そしてこれらのことが，子どもの深い学びにつながる。

学習が崩れそうになったら崩れる前にグループを解消し全体に戻す。また，学習に行き詰ったと判断した時はペアやグループでの学びに戻す。全体学習とペア・グループ学習を効果的に活用することで，子どもの深い学びにつなげていく。

①～⑤の共通理解事項を実践することで授業改善を図り，子どもたちの姿を変えていくことを目指す。

３．校内授業研究と同僚性の構築

次期学習指導要領においては，「授業研究」を通じた更なる授業改善の実現が求められている。教師全員が同じ視点で学び合いながら授業研究を進めていくことは，質の高い授業実践に必要不可欠であるだけではなく，同僚性が構築され，学年で協働して授業づくりをするなど，教師個人の校務の負担軽減につながると考えられる。

（１）同僚性の構築

同僚性とは，同僚が互いに支え合い，成長し，高め合っていく関係を示し，教育の分野では，学校内の教員同士の協働関係や援助の重要性を示す概念として使われ

ている。吉永（2010）は同僚性の高い学校の特徴（図１）を７点にまとめている。

・相互作用の範囲…「これは私の仕事である」という範囲が広い
・相互作用の場所…場所を選ばずに、いつでもどこでも授業や子どもの議論が行われる
・相互作用の頻度…より頻繁になる
・焦点化と具体性…教室の具体的な実践に議論の焦点があてられる
※教師の能力の問題と切り離して議論することが多い
・関連性　…教師の学校内の諸行為が統合的な関連性をもって結び付けられている
・互恵性　…同僚と互恵的な関係を築く
※ここでも実践と能力を区別する
・包括性　…同僚の結果に対して心を配ったり、他者の意思が尊重されるようにしたりしている。

図１　同僚性の高い学校の特徴

学校全体の協同的な学びの授業づくりに，協働で学び合いながら取り組んでいくことで，同僚性を高めながら，授業の質の向上を効率的に目指していく。

（２）授業研究会

一般的に行われている授業研究会においては，公開される授業の良い点と改善点に視点が当てられることで，参観者は授業者がどのような言葉で，どのように展開していくかという指導方法を追うものとなっている。そのため，研究協議会においても，授業者の指導方法が話題の中心となり，子どもたちの活動と授業の課題がつながるような話題があまり見られず，結果的に，授業研究会が日々の教師の授業力向上につながりにくくなっている。

そこで，協同的な学びの授業づくりを校内研修で進めていくことで，教師間の同僚性をより向上させていく。また，協同的な学びの授業づくりと実践を通して授業力向上と子どもたち一人一人の学力向上につなげていく。

協同的な学びの授業研究会では，授業者個人の指導技術ではなく，授業者がデザインした授業の中で，子どもの学びがどうであったかという学びの事実から授業を省察する。①どの場面でどのように学びが生まれたのか，②どの場面でどのように学びが深まったのか，③どの場面でどのように躓き行き詰ったのか，という子どもの中に生じた事実を授業者と参観者全員が省察し，共有することで協同的な学びの授業について教師も学びを深めることができ，授業力向上につながる。

効果的な授業研究会にするため，以下の流れで校内授業研究会を行う。

＜公開授業＞

①授業者はＡ４表面に＜教材について＞＜子どもについて＞＜授業展開＞を略案形式でまとめる。裏面に座席表を作成する。

従来の指導案作成は多くの時間を費やす。指導案を授業デザイン案（レシピ）にすることで，教材研究に集中し，学びの質を確保できるようにする。授業デザイン案には，どのようなジャンプの課題に取り組むのかを必ず明記する。

②参観者で役割分担を決め，全グループの学びの様子を観察する。

子どものつぶやきや視線，仕草，教師や他者の発言に対する反応，ノート等を注意深く観察することでどのような学びが起きているかを見取りやすくなる。観察した内容は参観者全員が協議会で省察できるよう，授業展開を表にした記録用紙に記録する。学び合う様子を協議するという観点から，参観者は観察中に子どもと関わらないことを原則とする。

③記録用紙の内容は，研究協議の視点（図２）で分けて付箋に記入する。

※主体性　…授業における子どもの活動の様子
つながり…授業における子ども同士，子どもと教材，子どもと教師のつながる様子
教材　　…共有の課題・ジャンプの課題と学びの関係性
授業者　…ファシリテートする授業者の様子

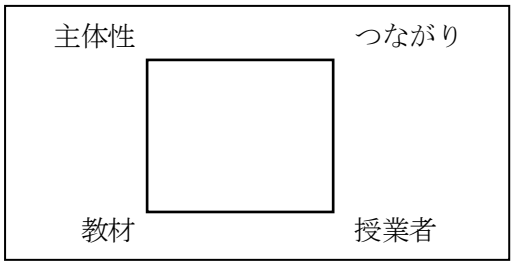


図２　研究協議の視点

＜研究協議会＞

①授業者は，デザインした授業と本時の授業について簡潔に全体で説明をする。

参観者全員が授業を観察しているので，授業者はどのような思いで「ジャンプの課題」を設定したのか，授業での子どもの実態をどう感じたかについて簡潔に話し，協議につなげる。

②観察したグループごとに，＜公開授業＞の③で作成した付箋を研究協議の視点を拡大印刷した用紙上でグルーピングする。

③グルーピングされた内容をもとに，子どもたちの学びについて省察する。

子どもたちの学びについて省察することで，どのような学びが起きていたのかをグループで共有する。

④全体で授業を省察する。

各グループでの省察を全体に発表することで，授業が行われた教室全体でどのように学びが深まっていったのかを全体で共有する。指導法の批判ではなく，子どもの学びの事実から感じたり考えたりしたことをつなげていくことで，協議会においても学び合う教師を目指す。

ＲＶ－ＰＤＣＡサイクル（＊１）で校内授業研究を推進し，ＤＰＲサイクル（＊２）を積み重ねることで，教師が学び合いながら授業力を向上し，より質の高い授業実践につなげていきたい。

＊１　Ｒ(Research:)・Ｖ(Vision)→Ｐ(Plan)→Ｄ(Do)→Ｃ(Check)→Ａ(Action)を繰り返し継続するプロ

セス

＊２　D(Design)→P(Practice)→R(Reflection)を繰り返し継続するプロセス

協同的な学びを実践していく上で，以下に挙げる３つの哲学を大切にしていく。

①公共（他者に開かれ，耳を傾ける）の哲学

小学校は学級担任制を採用していることから，仕事の大部分が学級担任個人に託されることで，担任間に大きな壁ができてしまう。すべての子どもの学ぶ権利を保障するためには，教師全員で子どもを育てる関係を築かなければならない。自分の授業を公開し，支え合い，アドバイスをしながら協同的な学びの授業づくりを進めていく。

②民主主義（他者と共に生きる生き方）の哲学

対話的なつながりが成立しなければ，協同的な学びを実践しても成果は見込めない。対話的なつながりは聴き合うつながりを土台としている。子どもと子ども，子どもと教師，教師と教師の間に「聴き合う関係」を構築しながら，子ども一人一人が学びの主人公になる協同的な学びの授業実践を進めていく。

③卓越性（常に最高のものを追求する）の哲学

基礎基本を押さえながら，よりレベルの高い課題を準備することで子どもたちに質の高い学びを保障する。教材研究を怠らず，レベルの高いジャンプの課題を提供できるようにする。

４．期待できる成果

協同的な学びの授業実践では，次のような成果が期待されている。

①授業中に居場所を求めている子どもは，グループや仲間の支えで居場所を体感することができる。

②自信が持てない子どもは，仲間に聴いてもらい共感してもらうことで自信をつけることができる。

③考えがまとまらず混乱している子どもは，友達の話を聴いているうちに自分の考えを整理，再構築することができる。

④理解が早い子どもは，友達に寄り添うことでいろいろな考えで課題解決の方法を理解することができる。

子ども同士の，聴き合い，さりげない優しさで支え合う互恵的な関係が，学校生活の落ち着きを生み，学校生活を安心して過ごすことができるようになる。その結果として，問題行動や不登校が減少する。

校内授業研究においても，教師が共通の視点で支え合い，学び合うことで，同僚性を高めながら授業力を向上させることができる。授業力を向上させ，一人残らず学ぶ権利を保障した，質の高い授業を実践することにより，学習高度化が図られ学力を向上させることができる。

５．研究計画

学校研究課題をもとに校内研修の計画を作成し，学校全体で協同的な学びの授業づくりに取り組んでいく。また，授業づくりについては，全学年に対して，随時働きかけを行っていく。さらに，学力向上の各種取組についても組織的に学校全体で行えるように計画し実践する。

６．研究の実際

（１）校内研修計画（学校研究課題）

平成30年度　研修計画(学校研究関係)					
月		日		曜	研修内容
6	月	7	日	木	学校研究課題について 「確かな学力を育てる 主体的・対話 的で深い学びの実践 ～ 一人一研究を通して ～」 ・授業を通して児童一人一人の学力を育てる。 ・主体的・対話的で深い学びについての一人一研究とする。 ・年度末に個人研究の成果をまとめ冊子にする。 ・教科領域は個人決定。 ・全体授業は7月の提案授業、北算研、各ブロック1回ずつ。
7	月	5	日	木	学校研究(講師:埼玉大学教授　庄司康夫先生) ・主体的・対話的で深い学びの授業実践について
		12	日	木	第1回校内授業研究会　5年　理科 ・協同的な学びの授業提案
9	月	6	日	木	学校研究(個人研究) ・資料提供と情報の共有化
		27	日	木	学校研究(個人研究)
10	月	4	日	木	学校研究(個人研究)
		25	日	木	学校研究(授業準備・個人研究)
11	月	15	日	木	学校研究(全体授業研究:高学年　5年社会) ・社会科における学び合いの授業提案
		22	日	木	学校研究(授業準備・個人研究)
12	月	4	日	火	北部地区算数数学研究協議会(低:2年　中:4年　高:6年) ・主体的・対話的で深い学びの授業提案
1	月	10	日	木	学校研究 ・まとめについて ・個人研究のまとめ
		24	日	木	学校研究 ・個人研究のまとめ ・授業準備
		31	日	木	学校研究(全体授業研究:中学年　3年理科)
2	月	14	日	木	学校研究(全体授業研究:低学年 1年書写)

（２）学校研究課題構想図

学校研究課題では，「確かな学力を育てる　主体的・対話的で深い学びの実践　～ 一人一研究を通して ～」

をテーマとして授業改善・授業力向上の研究に学校全体で取り組んだ。

（３）具体的な実践内容

①授業力向上の取組

ア　学校研究の充実

「主体的・対話的で深い学びの実践」に向けて，今年度は７本の授業研究会を実施したが，学校行事等の関係で定期的な開催が難しかった。学校研究課題決定後の校内研修では，協同的な学びのスーパーバイザーを講師として招聘しての講演会を開催した。「主体的・対話的で深い学び」の授業実践について多くのポイントを全教職員が理解するとともに，学び合う授業づくりについて共通理解を図ることができた。

【校内研修（講演会）の様子】

第１回校内授業研究会では，講演会の内容をもとにした授業を提案し，①教師がファシリテートする②グループによる対話的な学び③全体による対話的な学びについて協議した。これから学校に求められる授業づくりについて共通理解を図ることができた。また，研究協議では，児童の学ぶ姿から教師が学び合うことで，明日からの授業づくりに役立つヒントを学校全体で共有することができた。特に，「一斉スタイルの授業からの脱却」がキーワードとして挙げられた。

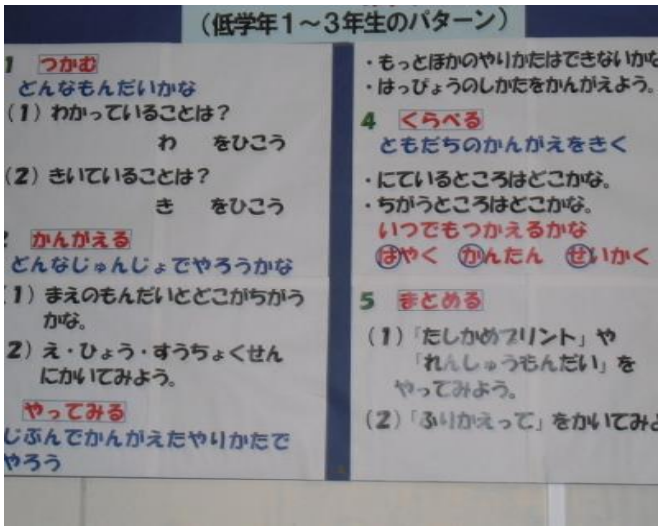
第２回校内授業研究会では，夏季休業中に収集した情報をもとに，コの字型（男女市松模様）や小グループの机配置で資料を読み取りながら課題を解決する授業が提案された。研究協議では，机配置の工夫の必要性や児童に示す資料の重要性が話題に上がり，普段心掛けていることやアドバイス等が多く飛び交った。

【第２回校内授業研究会提案授業の様子】

埼玉県北部地区算数数学研究協議会では，本校の教職員がこれまで学んだ成果を発表することができる場となった。ペア学習やグループ学習を授業の柱として，児童が支え合いながら課題解決に取り組み，子どもたちの言葉をつなぎながら授業を展開することができた。研究協議では，埼玉県北部地区の多くの先生方から貴重な御意見をいただき，本校教職員の励みとなり，自信へとつながった。

【北部地区算数数学研究協議会の様子】

校内研修においては，埼玉県の主体的・対話的で深い学びの実現６則をもとに学校全体で授業づくりの再確認を行うとともに，若手教職員のために，「石原小のスタンダード」の読み合わせを行い，「主体的・対話的で深い学びの実践」が行えるようにした。



【石原小のスタンダードの一部】

イ　若手教職員のサポート

本校の教職員の年齢構成は若手教員とベテラン教員の二極化傾向にある。経験年数の少ない若手教職員に対して，授業参観をしたり放課後に声掛けをしたりして授業づくりについて悩みを聞く時間を不定期で設けた。職員室で話をすることで，ベテランの教職員が会話に参加し，これまでの経験をもとにしたアドバイスを聞いたり資料を提供してもらったりすること

で，若手教職員の負担軽減にもつながった。また，自分の授業を全時間公開とし，いつでも誰でも参観できるようにした。初任者や臨任の教職員を中心に，授業を参観し，普段から抱えている疑問点等について話しながら一緒に解決することができる機会となった。

ウ　ベテラン教職員のサポート

若手教職員のサポートと同時に，ベテラン教職員のサポートも行った。「主体的・対話的で深い学びの実践」の講演会後に，多くのベテラン教職員が授業転換についての不安を感じている。また，第１回校内授業研究会後にも多くの質問が出された。このことに対して，校内研修の時間に個人研究の時間を多く設定し，教職員間で自由に交流して疑問を話し合ったり，授業づくりについて学年内で役割分担したり各クラスでの児童の様子についても話し合える時間となった。若手教職員が悩みを相談し，ベテラン教職員がアドバイスをしたり，ベテラン教職員が若手教職員にアイディアを求めたりする学年が多く見られ，教職員間で学び合う良い機会となった。

②学力向上に向けた組織的な取組

ア　「石原小のスタンダード」の徹底

児童一人一人が，基礎・基本を確実に定着するための学習の約束や全教科の授業づくりを一般化した「石原小のスタンダード」の徹底を図った。

ⅰ　石原小学校「学習の約束」

持ち物から各学年の主な学習内容，家庭学習の目安まで一目でわかるものを全家庭に配布し，全校で統一した。教職員は常にこれを意識し，きめ細やかな指導に心掛けている。家庭学習の見届けも，必ず行っている。

	1年	2年	3年	4年
筆箱の中に用意する物	鉛筆2B5本 赤青鉛筆 消しゴム ネームペン 9月～(15cm定規) もち方くん	鉛筆2BかB5本 赤青鉛筆 消しゴム ネームペン 15cm定規	鉛筆2BかB6本 赤青鉛筆 消しゴム ネームペン 定規(15cmくらい)	鉛筆B6本 赤ボールペン 青ボールペン (ノック式でない 消しゴム ネームペン 定規(15cmくら
道具袋の中に用意する物	でんぷんのり のり(液体) はさみ セロテープ	でんぷんのり のり(液体) はさみ セロテープ	(コンパス)学習後 (三角定規) のり(液体) はさみ セロテープ ホチキス	コンパス 三角定規 (分度器)学習 のり(液体) はさみ セロテープ ホチキス
別の道具袋			国語辞典	国語辞典
ノートの形式				
国語ノート	入門期→12マス	15マス10行	12ミリマス →12行縦線入り	12行縦線入り
漢字ノート	10マス	10マス5行 →12マス7行	12マス7行	15マス8行
算数ノート	入門期→13マス	10ミリ方眼	10ミリ方眼点線入り	10ミリ方眼点
理科ノート			10ミリ方眼点線入り	10ミリ方眼点
社会ノート			10ミリ方眼点線入り	22行10ミリ縦
家庭学習の内容とめやす	20分程度 音読 体力貯筋 読書 プリントなど	30分程度 音読 体力貯筋 読書 ドリル等	30分程度 音読 体力貯筋 読書 その他宿題	40分程度 音読 体力貯筋 読書 その他宿題

【学習の約束（一部抜粋）】

ⅱ　頭のよくなる６か条

学習の基本として，全学級に掲示している。毎日朝の会で唱えるようにした。また，今月の生活目標とも連携し，強化月間を設けるようにしている。

①授業の準備は始まる前に

②授業のスタートあいさつで

③ペタン　グー　ピン

④人の話は顔を見て

⑤大きな声で「はい、・・・・です。」

⑥指一本天使の輪

ⅲ　学力向上の取組

・詩の暗唱

年に４回暗唱の月を設け，名文を暗唱する。暗唱できた児童には，合格証を渡し，全児童が必ず暗唱できるまで取り組んでいる。

・漢字検定

年に２回，各学年で習った漢字のテストを行い，全員が１００点を取れるまで取り組む。

・計算検定

年に２回，各学年で習った計算のテストを行い，全員が１００点を取れるまで取り組む。

・辞書引き検定

年に１回４年生以上が辞書を的確に弾けるか検定を行う。

・読書チャレンジ

年間１００冊以上の読書を目指す。高学年は５０冊以上を目指す。

・コラム学習

年間を通して計画的に，４年生以上が新聞記事に対しての感想を書く。

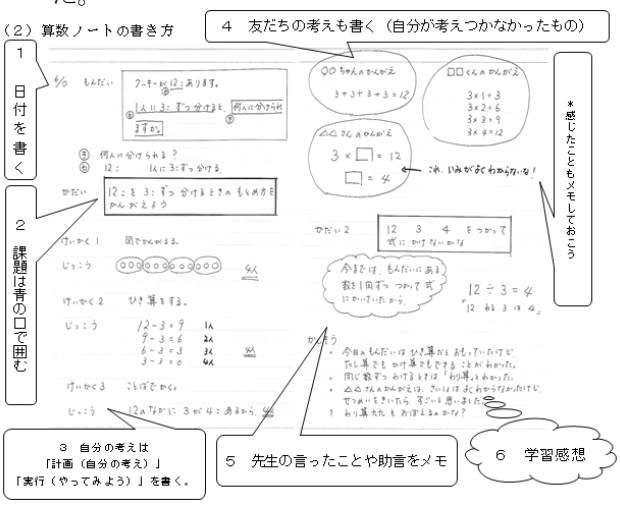
・日記

自主学習ノートや連絡帳に，毎日三行日記を書く。テーマを決めて，事実と感想，自分の考えを分けて書き，文章の基本を習得させる。

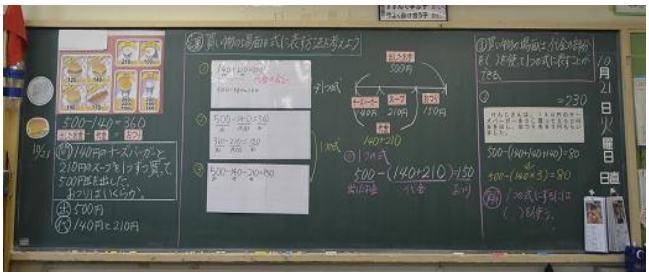
ⅳ　「わかる・できる授業」の実施

・授業の流れがわかる板書・ノート

板書とノートの書き方を統一している。学習内容と手立てを明確にした授業を行うには，よい板書が必要である。また，よいノートは復習に役立つ。これらを統一することで学力向上の一助とした。



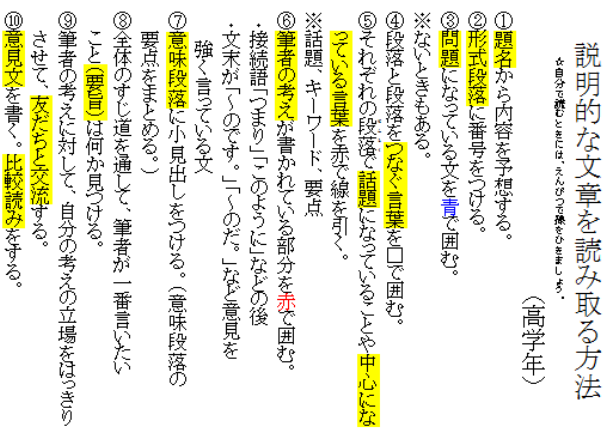
【授業の流れがわかるノート例】



【授業の流れがわかる板書例】

・説明文・物語文の読み方

説明文と物語文を読み取るにためのマニュアルをブロック学年ごとに作成し，教室に掲示している。また，国語の教科書にも貼り付けて，いつでも見ることができるようにしている。



説明的な文章を読み取る方法

☆自分で読むときには，えんぴつで線をひきましょう。

（高学年）

①題名から内容を予想する。
②形式段落に番号をつける。
③問題になっている文を青で囲む。
※ないときもある。
④段落と段落をつなぐ言葉を□で囲む。
⑤それぞれの段落で「話題になっている」とや中心になっている言葉を赤で線を引く。
※話題、キーワード、要点
⑥筆者の考えが書かれている部分を赤で囲む。
・接続語「つまり」「このように」などの後
・文末が「～のです。」「～のだ。」など意見を強く言っている文
⑦意味段落に小見出しをつける。（意味段落の要点をまとめる。）
⑧全体のすじ道を通して、筆者が一番言いたいこと（要旨）は何か見つける。
⑨筆者の考えに対して、自分の考えの立場をはっきりさせて、友だちと交流する。
⑩意見文を書く。比較読みをする。

【説明的な文章を読み取る方法（高学年）】

v　表現力・思考力を高める「交流」

児童一人一人が自分の考えに自信を持ったり，考えを深めたり，お互いの考えを聞きあったり伝え合ったりする時間を各教科で意図的に入れている。発表名人と名付けた交流マニュアルも各学年で作成し，話すことが苦手な児童も自分の考えを伝えられるようにしている。また，交流を継続することによって，話す・聞くだけではなく，ノート等に自分の考えを論理的に書く力も身に付いてきている。

イ　補充学習の取組

３年生以上を対象に補充学習を実施した。４年生以上の学年では，埼玉県学力・学習状況調査の結果をもとに，下位層の児童を中心に学力の底上げを図った。学年担任中心ではなく，担任外が中心となって運営することで，どの学年も共通のスタンスで取り組むことができた。スモールステップで「コバトン問題集」や「サンプル問題」プリント学習に取り組むことができるようにしたことで，児童一人一人が達成感を味わいながら学習を進めることができた。また，１月からは中間層付近の児童を対象にして実施し，広い範囲の児童を対象に補充学習を進めることができた。

７．アンケートの調査結果

（１）児童アンケートから

今年度，学校の授業に関するアンケートを４月と１２月に実施した。（５月：７５３名　１２月：７５５名）以下は，その結果である。

学校の授業に関するアンケート

①あなたは，授業の内容がわかりますか。
４　３　２　１

②あなたは，授業が楽しいですか。
４　３　２　１

③あなたは，授業に進んで取り組んでいますか。
４　３　２　１

④あなたは，普段の授業で，はじめに授業の目標が示されていると思いますか。
４　３　２　１

⑤あなたは，普段の授業で，最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていると思いますか。
４　３　２　１

実施アンケートの結果（%）

項目	５月				１２月			
	4	3	2	1	4	3	2	1
①	56	37	4	3	56	38	5	1
②	54	33	8	5	59	33	5	3
③	42	48	7	3	48	44	7	1
④	70	24	3	3	73	23	3	1
⑤	65	20	12	3	68	22	8	2

・アンケートの結果から

全ての質問項目において高い結果が得られているが，質問項目③主体性については「あてはまる」と回答した児童数は，５月，１２月ともに半数を割る結果となった。他の項目との差が大きく開いていることから，授業づくりにおける課題がまだ山積していることが考えられる。また，全ての項目において「あまりあてはまらない」「あてはまらない」と回答している児童の割合が減少していることから，教職員が感じている授業の質の変化を児童も感じ取っているということが考えられる。引き続き，主体性の数値が向上していくよう，授業の質の向上に，全教職員が協働で取り組んでいく必要がある。

（２）教職員聞き取りアンケートから

今年度の学校研究課題「確かな学力を育てる　主体的・対話的で深い学びの実践　～ 一人一研究を通して ～」に取り組む中で，感じてきたことを教職員に調査した。以下はその結果である。

○ちょっとした工夫（ペアでの話し合い，グループでの話し合い，机配置の工夫，課題提示の工夫，発言の切り返し）により，児童の反応に変容が見られた。
○学年やブロック学年で相談しながら進めることができたので，多くの情報を得ることができた。
○迷い迷いでいろいろと試しながら，少しずつ授業のスタイルが見えてきたような気がする。
○無理だと思っていたが，試して上手くいったときは子どもの反応が違う。
○子どもたちの言葉をつなげていくことで理解が深まっていくということを実感できるようになってきた。
○子どもたち
○新しい教育を勉強しているようでとても大変だったが，自分にできることから地道に進めていきたい。
○課題選び，資料選びが非常に難しい。今後も課題である。
○たとえ正解が出ても，周りの子どもたちに再確認したり，発言させたりすることで理解を深めることができるのだと実感した。
○コの字型の机配置，男女混合市松模様のグループづくりは効果が感じられた
○「つなぐ」を意識してもなかなかできない。
○研究授業をすることが一番の勉強になった。
○もっと多くの先生方の授業を参観して勉強したい。
○ほかの学校の取組など，取り組んでいる学校の授業参観をして勉強したい。

・アンケートの結果から

多くの教職員から聞くことができたのは児童の変容の様子であった。教師の意識が変わることで授業が変わる。授業が変わることで児童の表情が変わる。授業改善・授業力の向上を図ることで，教師の努力を子どもたちに還元することができ，相乗効果を得ることができたといえる。しかしながら，継続して，全教科における「学び合う授業」づくりを進めていくことにおいても難しさを感じている。全教職員が年間を通して取り組んだ個人研究や，普段の授業における取組内容，作成した教材等をしっかりと共有化し、授業づくりに協働で取り組むことが今後の課題である。

８．成果と課題

「主体的・対話的で深い学び」の実践に，学び合う授業づくりを柱に年間を通して取り組んだことで，普段の子どもたちの学ぶ様子が職員室の話題に上がったり，授業づくりについて話し合ったりする先生方の姿が多くみられるようになった。特に授業においては，子どもたちの言葉をつなぐ先生方や，支え合いながら課題に取り組む子どもたちの姿が多くみられるようになり，主体的に活動する子どもたちも増えてきている。授業以外でも，先生方が目的を共有化し協働することで，成果を得ることができた。また，学力向上に向けた組織的な取組については、協働で取り組むことで少しずつではあるが，成果を上げることができた。しかし，先進校視察や校内授業研究会の開催時期や開催方法，協議における時間配分，先生方一人一人の研究の情報交換を十分に図れなかったことが今後の課題である。

５．引用参考文献

・国立教育政策研究所「国研ライブラリー　資質・能力理論編」東洋館出版社 2016
・文部科学省「平成 29 年度小・中学校新教育課程説明会（中央説明会）における文部科学省説明資料」2017
・埼玉県「主体的・対話的で深い学びの実現６則」
・佐藤学「学校を改革する－学びの共同体の構想と実践－」岩波書店 2012
・佐藤学「学校の挑戦－学びの共同体を創る－」小学館 2006
・佐藤学「教師花伝書－専門家として成長するために－」小学館 2009
・佐藤学「学び合う教室・育ち合う学校　～学びの共同体の改革～」小学館 2015
・大瀬敏明「学校を変える　－浜之郷小学校の５年間－　」小学館 2003
・佐藤雅彰　佐藤学「公立中学校の挑戦　授業を変える　学校が変わる 富士市立岳陽中学校の実践」ぎょうせい 2003
・石井順治「授業づくりで子どもが伸びる，教師が育つ，学校が変わる「授業づくり・学校づくりセミナー」における「協同的な学び」の実践」明石書店 2017
・茅ヶ崎市立浜之郷小学校「平成 29 年度研究紀要学びあう学びをもとめて　～教室をひらき　授業を変える　No.20～」2017
・飯能市立富士見小学校「平成 28 年度研究集録「聴き合い，学び合う子どもの育成」～子どもが活きる授業の創造～」2017
・「近畿大学教育論叢」杉浦健・奥田雅史『学びの共同体の授業実践　－理論，現状，課題－』2014
・「日本教育学会大會研究発表要項」鈴木悠太『教師の「同僚性（collegiality)」の概念をめぐる争点と課題』2008
・日本学校教育学会「学校教育研究」第 30 巻 北田佳子『なぜ，いま「協同的な学び」が必要とされているのか－「知識経済」の限界を乗り越える力を育むために－』2015
・奈良教育大学教職大学院研究紀要「学校教育実践研究」後藤壮史『学校現場における同僚性の構成概念についての検討－教員間の関係性に着目して－』2016
・宇都宮教育センター「研修ニュースレター」第 12 号吉永紀子『授業における子どもの学びへのまなざしを豊かにする校内授業研究』2010